
魔物学園 高貴なスライムと忠実ではない仲間たち

まじしゃんX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔物学園 高貴なスライムと忠実ではない仲間たち

【Nコード】

N7515W

【作者名】

まじしゃんX

【あらすじ】

俺の名前はキリル「スライムプリンス」。名前の通りスライムの王子様をやっているのだが、最近頓に冒険者と名乗る人間の侵略者が俺たちの迷宮に攻め入ってくる。父上が言うにはどうしようもないことらしいのだが、いい加減やられっぱなしなのも飽いてきた。そんな折に魔物による魔物のための強化施設である【学園都市パンデモニウム】が開設されると聞いて即座に俺は飛びついた。自分を高め、いつかは俺の住まう迷宮に鉄壁の守備陣を敷き、人間どもの住まう居城を一網打尽にしてやる。けれど人生・・・いや、魔生はそこ

まで上手くはいかないようだ。魔物緋めく学園都市。己を磨くのは
どうやら簡単なことではないらしい。いいぜ。俺の敵になるのなら
一網打尽にしてやるし、正々堂々卑怯な手を使ってでも勝利してや
る。魔物だけが住まう異世界学園ファンタジーここに開幕！

1・友達になろう

彼は悲しみに打ちひしがれていた。

薄暗い迷宮の中、毎日倒れていく仲間たちを思うと涙が止まらないのだ。

財宝を狙う冒険者たちに屠られる同族。守るために前線に出張ろうとしても護衛がそれを許さず、得てして玉座に引き籠る日々が続く。そして月に一度の英雄を祭るための鎮魂歌を謳うときだけ兵士たちの顔を見ることができたのだ。

誇り高きスライム一族の末裔たち。

毒を持つもの。溶解液を持つもの。何も持たないもの。ありとあらゆる同族たちが一斉に集い、音痴な歌声で悲しみを歌う。

“ 気高き勇者よ 貴君らの勇姿は末裔まで伝う 貴君らの意志は我々が受け継ごう ”

家族の死に液状の身体を震わせ、彼らは歌う。

敗北の日々。打ち負かされる日々。積み立てた財宝を強者に奪われる日々。

打開できぬ問題に晒され続けて幾星霜。

彼らは疲れ切っていた。

玉座に座るのはフォドゥススライムキング。

スライムの王である。

魔獣や魔族は位が上がれば上がるほどに人の姿を模すようになる。彼も例に漏れず、莫大な魔力と液状の身体を行使して人の姿を模していた。

豊富な髭を持った美丈夫。気骨逞しげな凛々しい顔立ちの壮年の男だ。

真っ赤なマントに金や銀で複雑な刺繍でスライム族の勲章を刻ん

でいる。しかし下卑た豪奢さではなく、気品のある模様となっている。

傍らには側近であるモラウ＝スライムロイヤルナイトを傳かせ、沈痛な面持ちで家来の鎮魂を願っていた。

「此度、我らが礎となった勇者は？」

「部族が三つ。おおよそ千は下らぬかと……」

「哀れなことだ。王たる己の力が足りぬ故、下々のものに迷惑をかける。すまぬ……」

「王！ 彼らは王のために身を粉にして戦うもの！ 決して彼らの前では弱気な姿を見せぬようお願いします……っ！」

「理解はしているが、こつも犠牲者が出るとな」

フォドの無気力なため息が漏れた。

モラウもその気持ちは察してあまりあるのだろうが、しかし国民に王の弱気な姿を見せるわけにはいかない。今は葬儀の最中なのだ。

迷宮の地中深くにあるスライムキングの城。

その眼前に広がるのはスライム一族が生活する城下町だ。

天井には莫大な光量を放つキシヒ苔が茂り、本来なら暗い迷宮を明るく照らしている。

テラスから見下ろせる広場には多くの遺族が揃い、中央にある棺桶は一つ一つ炎が灯されていく。

燃やされた遺体からは根性色の魂が浮かんでいき、地中の天蓋を青色に染め上げる。テラスからそれを見上げるたびにフォドの顔色が蒼白になるのだ。

国民は擬似的な青空を見上げ、黙祷する。

願いはそれぞれだろう。転生を信じるものがいれば、無に還ることを信じるものもいる。天国を信じるものもいれば地獄を信じるものもいる。けれど今世での再会を信じるものなど誰もいない。

涙を浮かばせ、彼らは一心に願うのだ。一時の安息を。

「王……」

「わかっておる」

沈鬱な表情を胸の奥に仕舞い込み、フォドは国民を見下ろした。自尊心の溢れる高貴な佇まい。

先ほどまでの無気力な姿はそこにはなく、威風堂々と立つ王の気品を兼ね備えたフォドがいた。

テラスから国民を見下ろす。それだけであらゆる部族たちがフォドの姿を見上げ、彼の言葉を待つのだ。

フォドにとっては慣れた所作だが、それでも緊張はある。彼の一言で国民は一喜一憂し、氣勢を上げて戦場を向かうのだ。それが王たるものの役目と知りつつも、仲間を死地に送り込むことは彼の主義に反する。

上に立つものの義務。それを放棄できるだけの我儘は幸か不幸か、フォドは持ち合わせていなかったが。

すう、と息を呑む。

「侵略者たちは我らから大切なものを奪い取った」

演説が始まる。

「誇りある騎士たちは敵に背を見せずには戦い切った。我が国民を守るため、矛となり、盾となって彼らはその身を散らせた。その想いは様々なものだろう。栄光を掴むため。はたまた生活のため。家族のため。友のため。恋人のため。子供のため。彼らはその身を投げ打った。最大の感謝と、最大の尊敬を！！」

広場に集うものたちがその身を震わせ、音を立てる。はち切れん

ばかりの拍手がフォドの身を襲う。

それは心地良いものではなく、妙な圧迫感を伴わせるものだった。彼らの瞳には絶大な期待がある。王に対する尊敬と、王が今回の件を持って出すだろう秘策を待ち望んでいる。

改革を願われている。

「キリルを呼べ」

一時経ち、モラウがキリルと呼ばれた少年を連れてきた。

ドールように整った美貌の持ち主だ。

キリルはスライムプリンス。彼はフォドの養子であり、第一位王位継承者である。

王族だからか。瞳に宿る知性は確かなもので、恐ろしいまでに鋭い目つきをしている。

「キリル、覚悟はできておるうな？」

「もちろんです」

フォドの一步前に立つとキリルは将来自分が責任を持って導かねばならないものたちを眼下に収めた。見る見る目つきが険しくなり、緊張を解すためか。大きく息を吸って、大きく息を吐くという仕草を繰り返している。

フォドはぽんとキリルの肩に手を置くと、キリルはフォドに笑顔を返した。朗らかな。とは言えない少し口角が引きつった不自然な笑みである。

しかし、語る覚悟はできたのだろう。テラスから国民を見下ろす目にある種の覚悟が浮かんだ。

「此度は本当にご苦労だった。遺族たちにはこれからの平和を約束しよう。何故なら俺が諸君らを守るからだ！」

歓声が上がる。

「我らが迷宮を創造された魔王様が以前から計画していたものが実施されることになる。魔界では初の試みとなる学校機関の創設。ここではあらゆる種族が混じり、最高の環境を以って教育が為される。そこで俺は己を磨き、国のためになるように学びを受けて来よう。最高の環境で、最高の教育を受け、最高の結果を出す。それが次代の王たる俺の役目だと自負している！」

フォドもモラウもキリルの言葉に聞き入っていた。国民をキリルのことを一心に見上げていた。

「我が身は諸君らの血税によって象られている。造られている。生かされている。今こそこの恩を返す時が来たのだらう。キリル！ スライムプリンスはこの場で誓う！ 必ずや結果を持ち帰り、諸君らに安寧なる完全な世界を提供することを！」

そうして演説は終わり、葬儀は終わりを告げた。

大歓声の後に、キリルはこの場を去る。

荷造りは既に終わっていて、少数の見送りとともに迷宮を去って行ったのだ。

「必ずや結果を持ち帰ります」

「期待しておるぞ」

ここにスライムの展望をかけた学園生活が幕を開ける。

？
壱・友達になろう

新たに創設された教育機関【学園都市パンデモニウム】は広大な面積を誇っていた。

人界での拠点として造られた迷宮とは違い、【学園都市パンデモニウム】は魔界でも最も交易が盛んであり、魔王城からもほど近くにある【竜山タイタース】の麓に建設された。

けれどここに来るまでにキリルは何度も命を落としかけた。
迷宮は人界にあるのだ。

いくら人の姿を模しているとは言え、直感の強いものがいればキリルが魔物であることなど瞬時にして露出する。故に多くの騎士や冒険者との戦闘を経て、逃亡を繰り返して、命からがらキリルは【学園都市パンデモニウム】に到着することができたのだ。

その道程、実に徒歩一か月。馬車三日。最寄の村々を襲って食料を調達している時間が贅肉となつているので本来ならもう少し早くつけたのかもしれないが、これがキリルにとっての最短だった。

「……すごいな」

堅牢な都市を外から見て真っ先に出了た言葉は感嘆である。

学園都市全てを覆う巨大なゴーレムですら破砕できないような分厚く聳え立つ堅牢な外壁。交易路には多くの護衛兵士が配置され、商人たちが気軽に行き交っている。おかげで途中から馬車に乗つての楽な道程となっていた。

破城兵器ですら幾つも同時に運べそうな広い門は大きく開け放たれており、門番が道を遮っている。人型の魔族からして高位なもの

なのだろう。高価な黒鉄の鎧の黒鉄の槍を装備した、よく練磨された兵士のようにだ。

馬車馬を指揮する商人兼御者は荷台に乗ったままぺこりと頭を下げ、兵士に通行許可証を示す。すると兵士は荷台にある荷物の後ろ側に座っているキリルに視線を移した。

「後ろに乗っているものは何だ？」

「へ、途中で拾った……ここに来た学生さんのことです」

「ふむ、証明できるものはあるか？」

キリルは荷台から降りると肩に下げた鞆から羊皮紙を取り出した。迷宮を統括するフォドリスライムキング直筆の証明書にはスライム一族の刻印が押され、魔王の直筆の署名も連ねられている。確かな証明書だ。

門番の兵士はそれを受け取るとしげしげと文面を読み、さっと頭を下げる。

「確かに。通るがよい」

「ありがとうございます」

キリルは頭を下げると【学園都市パンデモニウム】の中へ入る。どうやら商人は荷物を卸す場所へ赴くので別れることになった。キリルは商人へ感謝の気持ちを含めたささやかな謝礼を手渡し、学園までのおおよその方角を聞いて歩み始める。

散策ついでにのんびりと歩くが、実に広大である。初年度ということもあって工程がまだ終わっていない建築物も目立つが、それにも増して完成されているものが素晴らしいものばかりだ。

魔力を鍛えるための魔導の施設。新旧混じり合う鍛冶師の工房。筋力を向上するための施設。中には人間の騎士を捕まえて奴隷戦士として働かせる闘技場などの娯楽もあった。全てキリルの住まう迷

宮にはないものばかりである。

今歩んでいる露店市場にはさまざまな食物が並んでおり、食べたことがないものも数多くある。中には盗品だろうか。銘入りの刀剣もあり、値段を見た瞬間に目を覆いたくなるようなものもあった。

それらを見ている種族も実に多種に渡る。

牛頭の巨躯を持つミノタウロスは背を思い切り曲げて食物を選んでいる。緑色の鱗を隠そうともしないリザードマンもいれば、ふさふさの尻尾をぶんぶんと揺らしながら露店を眺める人狼もいる。禿頭のチビで異様に腕の筋力が発達したゴブリンもいれば、小さな翼をはためかせて空を舞う妖精であるピクシーもいる。

全員がこの場所に慣れていなさそうで、しげしげとあらゆるものを観察していた。上気した頬であらゆるものに目を向ける様はさながら好奇心旺盛な子供のよう。

キリルも例に漏れず「まあ別に学校はまだ始まるわけじゃないし……」と自分に言い訳をし、財布の中に突っ込んでいる所持金を確認し、そうして露店を回り始めた。

キリルが最も興味を持ったのは【魔導書】^{スクロール}である。一度読めば消滅してしまう類の呪いがかかった書物なのだが、これを読めば中に記載されている魔法を覚えることができるのである。煩わしい修行を飛ばして魔法を覚えられるのはひどく魅力的だ。もちろん効果が高いが故に希少なものであり、値段も張る。

魔導が施された装飾品や呪われた武器など他にも見るべきものはたくさんあるのだが、どうしても【魔導書】^{スクロール}から目が離せない。

「お兄さん、【焰王の遺書】に随分とご執心だね。お目が高い！」
「随分と大層な名前だが、効果のほどはどうなのだ？」

「さてねえ。こういうものはたまにしか入らないものだからね。試すわけにも行かないし、だいたいが博打になるよ。見れるのはタイトルだけさ」

「なるほど……」

「他のも見るかい？」

キリルの服装は王族特有の高貴なものなので【スクロール魔導書】などという高価なものでも露天商の主は警戒せずに見せてくれ、キリルは堂々といういなものを見ることができた。

中には店の奥にある荷台から引っ張り出してきた蔵書などを出し、キリルの目を惹くのである。

結局購入することになったのは【学園都市パンデモニウム】の周辺地図と魔王領の広大な地図だけとなる。

店主の「ありがとうございましたー！」という大きな声を背に別の店に向かうキリルだったが、突然大きな音が聞こえて立ち止まることとなる。地響きのような腹に芯を震わせる衝撃を伴った音だった。

ちらりと向けばそこには人だかりが出来ている。腕っぷし自慢だろ？種族が何かを囲うように集まっており、その人ごみを押しどけて中を見てみれば、中心には大きな翼と尻尾を持つ少女が机の上に腕を差し出し、挑発的に指を動かしているのだ。その前には悔しがる石で出来た強靱な身体を持つゴーレムがいた。

「くっそおおおおおおおおお！！　こんな雌餓鬼に負けた！！」

「いやはや、悪いね悪いね。勝負は時の運ってね。また挑戦しておくれよ、お兄さん」

見れば腕相撲をしていたのだろう。すごすごと引き下がるのはゴーレムの方である。

「さあ！　腕相撲であたしに勝てば三万ゴールド！　挑戦料はたったの千ゴールド！　安いよ！　安いよ！　こんないたいけ幼気な少女に腕相撲で勝つだけで簡単に金が入るんだ！　やらない手はないね！！」

悔しがる男が多数いることから既に幾人もの敗者がいるのだろう。次に挑戦するものが現れることなく時は過ぎ、次第に少女のテンションは下がっていく。ぶんぶんと振っていた金色の鱗の生えた尻尾もだんだんと垂れ下がっていくようだった。

面白そうだ、とキリルは最前線で腕を組んで見物人として洒落込むことに決めたのだが、少女と目が合った。少女がにやりとしたのだ。獲物を見つけた猛禽類のような笑みで。

「おつ、どうだいその男前！ 人型を模してることからきつとお強いんだろう？ できればできれば、あたしと一戦交えようじゃないかい？」

喧嘩を売られているのか。くいくいと指を動かして挑発してくる。左を見ても、右を見ても、人型を模している高位の魔物はキリルしかない。間違いなくこのハンサムとやらは自分を指名しているのだろうとキリルはため息を吐いた。

断るべきか悩むところではあるが、どうやら勝負は決定しているようだ。周囲の男たちは「兄ちゃん、やっちまえ！」と囁し立てて来て、逃げれる雰囲気ではない。

それに喧嘩を売られて逃げるなど、次代の王にあるまじき所行だ。一步前へ出ると歓声上がる。少女によほど負かされたのだろう。男たちは必死にキリルのことを応援し始めた。

「確認しておくが、見たところ腕相撲か？」

少女はきよとんとした顔つきになると「そうだよ」とこくりと頷いた。

「ルールは？」

「机に拳をつけられた方が負け」

「それ以外のルールは？」

「いや、腕相撲ってそれ以外にルールあったっけ？ あたしの生まれでは何もなかったけど。あ、もちろん足技やら魔法やらはなしだよ。何かもう凄い喧嘩になりそうだし」

「わかった。じゃあ勝負と行こう」

右手を突出し、握り合う。そして肘を机につけ、体重を傾けつつ睨み合う。

少女の触れた手は柔らかそうな外見には似合わず、ごつごつとした感触をしている。握った途端に万力のような握力が伝わり、正攻法では勝てないことをキリルに教えてくる。

(……まあ物は試しか)

キリルは卑怯な手を使うことを決意した。

「レディ、ゴー!!!」

観衆の男が合図をし、キリルと少女は力を込める。

勝負の最初は少女に傾き、キリルの拳は地面に着きかけた。発破をかける男たちの激励も意味はなく、緩やかに、そしてあっさりとキリルは敗北しかける。だが途端に少女は眉間に皺を寄せて苦痛を漏らした。

握られた両方の手は拮抗し始める。

見ればキリルの手からは、溶解液と麻痺毒を孕んだ体液が滲み出ている。あらゆるスライムの性質を持つスライムの王族だからこそ為せる必殺技かつ、普通は腕相撲などでは使わない嫌がらせに近い奥義である。

「ちよ、ちよ！ 痛いし溶ける！ 待つてよこれ！ こんなのもってあり！？」

溶解液と麻痺毒を手に浸透させられて力の少女はどんどんと拳が地面へと近づいていく。力を込めようと努力はしているのだろう。ぎりぎりと高まる握力は、身体的に骨のないキリルの手を握りつぶさんが如くの力を秘めているが、拳の硬度を鉄に変えれば問題はなくなった。

「卑怯！ なにこいつ！ 卑怯！ 力以外で何かいろいろやってくる！ なにこれ！ なにこれ！？」
「卑怯だとはわかっていているけど、それでも俺はルールを確認したつもりだが？」

少女はむつとすると、瞬時にして怒気を混じらせた双眸をキリルに向ける。

今にも地面につきそうだった少女の拳の感触が変わり、加えられる力も段違いになる。

(何だ、これは……)

突然の反撃に目を瞠った。

原因は一つ。少女の手の皮膚は金色の強靱な鱗にびっしりと覆われ始めていた。

金色の鱗を持った翼。尻尾。そして全身を覆うことのできる鱗。ようやくにして思い立った相手の種族にキリルは戦慄を覚えた。

「じゃああたしも使っし！」

目には縦に裂けた黄金色の瞳が浮かんでいる。どう見ても【魔界ゴルドラゴン

の守護竜】である。

人間の一個大隊を一体にして屠った最強の竜族。

その逸話は誇張が過ぎるかもしれないが、それほど強いと謳われる現存する魔物でも最強に近い種族である。

消化液も麻痺毒も黄金の鱗に阻まれて意味はなく、勝負はゆるやかに、迅速に少女の勝ちとなってしまうた。

敗北したのはキリルである。

「どうよ！ あたしの勝ちい！」

キリルの特性を鱗一つで破った少女は天高く拳を衝き出す。とても楽しげに勝ち誇っていた。

その姿を見てキリルは思う。黄金色の鱗がある翼と尻尾を見たときに気付くべきだったのだ、と。

頭が良くなさそうに見えるアホ毛としか言いようがない癖っ毛と、穏やかな・むしろ柔和そうな笑みを浮かべる元気印の顔立ち。そして全身を覆うのは安物にしか見えない色あせた灰色の襦袢。

ここから“最も高貴な魔物”と呼ばれる【ゴールドドラゴン魔界の守護竜】をどうしても連想できなかったのがキリルの敗因だろう。今も素直に感情を露わにして喜ぶ様は、頭の足りないゴブリン族の奴隷たちの所作によく似ていた。

男たちは「お前ドラゴンだったのかよ！ ずるい！ ずるいぞ！」と罵声を浴びせられている少女だが、物怖じせず「騙された方が悪いんだ！ ばーか！ ばーか！」と言い返している。どうしても“高貴”という単語と結び合わせることができない。

観衆たちはひとしきり暴言を吐くと散り散りになり、少女はにひひと笑いながら木編みの籠の中に乱雑に置かれた千ゴールド札を愛おしそうに撫でつける。

「ほれ、ハンサムで卑怯なお兄さんも代金払って！ 千ゴールド札

！ はやく！」

「あ、ああ……」

勢いに押されてキリルは財布の中からお金を取り出して少女に渡すと、少女はとても幸せそうな表情で受け取った。妙に印象的だった。

千ゴールドとは要するに豪華な昼ごはんが食べれるくらいの金額である。そこまですて喜ぶものではないし、【魔界の守護竜】ユールドラゴンが心底渴望するような代物ではない。

それなのに何故？ と頭の中で疑念が廻る。

「何よ？ 絶対金は返さんからね。絶対よ。絶対返さんから！」

少女は大事そうにお金の束を革紐で束にし、ウエストポーチにしっかりと入れる。言葉の通り堅い決意を以って渡す気がないようだが、一応は王族であるキリルにそのような端金はしたかねに執着するような神経はない。

手を振りながら奪い取る気はないことを明確に伝えると、少し考え込む。

結論は簡単に出た。

「もしかしてこの学生に希望してきた人？」

「へあ？ ああ、うん、そだけど……」

「奇遇だなあ。俺もさっき来たばかりの入学希望者なんだ。ここで会ったのも何かの縁だ。友達になろう」

少女は詐欺師を見るような猜疑心溢れる視線をキリルに向ける。いつそ清々しいほどに疑念しかない眼差しにキリルは苦笑を漏らす。

「俺の名前はキリル。君と仲良くなりたかったのは本当だ。君みた

いに綺麗な鱗を持つ素敵な女の子と仲良くなりたいと思うのは雄だつたら当然だろう？ 少しはチャンスをくれないか」
「怪しさ爆発しすぎ。絶対にノウ！」

強圧な拒絶。しかしキリルはめげなかった。

最強に近い【魔界の守護竜】^{ユール・エトリュン}が目の前にいて、さらにそいつはおそらくは貧乏だと来た。鴨が葱背負って鍋と火打ち石と灌木を全部一緒に連れてきたような美味しい相手である。
逃す筈がない。

「お腹が空いたな。どこかに食べに行かない？ お勧めの場所があるのなら是非そこがいい」

「あたしの名前はローラン！ いやいや、きつとあたしと兄さんは仲良くなれる。そんな気がするよ！」

驚くほどの早変わり。敵意は失せ、好意すら感じさせる。

縦に裂けた瞳と鱗が埋め尽くされた手が引つ込み、空色の瞳と柔らかそうな肌に戻った。おそらくは擬態だろうが。

ある程度の警戒心を解せたことに安堵したキリルはローランに利き手を差し出した。

「じゃあ行くこう？」

につかかと笑ってローランは手を取り、キリルのことを先導する。

歩みからしてローランはこの都市に慣れていた。学校が始まる目前に着いたキリルと違い、数日前に着いたのだろう。その足に迷いはなかった。

付いていくすがら、さきほど購入した地図を脳内で浮かべ、現在位置と符合させていく。現在位置は装飾品や【魔導書】^{スクロール}などの高級なもの専門の場所であり、向かっている先は食品関係の露店市場だ

った。決して高いものはなく、路地裏の角をいくつか渡ればすぐに着くような距離だ。

ふとローランの方を見れば楽しげにスキップを刻んでいる。ローブは襜褕。おそらくは高等教育は受けていないのだろう。人型になる術式も中途半端。強さと技術があまりに不自然なローランのことをキリルは後ろから用心深く観察していた。

「いやはや、こっちなあ。美味しい饅頭が売ってるんだけど高くて手が出せなくて。生活費もぎりぎりだからやっとのところであんな悲しい商売してたわけよ」

突然声を掛けられてどきりとしたキリルだが、ただの他愛無い話に安堵する。

「地元の支援はないのか？」

「ないねえ。ま！ 家庭の事情と言っちゃつですよ」

「家庭の事情？ 貧乏とか？」

「うん。その通り！ だからこうして金を稼ぐんだ」

彼の一族で貧乏など有り得ない。強さは正義であり、金にも地位にもなる。真つ当に働いては稼げないような大金を寝ながらにして稼げる一族である。

裏があるな、と思いつつもキリルは話を合わせるが。

「学費はどうするんだ？ 高かったはずだけど」

「トクタイセーなのですよ。すごいっしょ」

「特待生……まあ君みたいに強ければ当然なのかもしれないな」

「へへ、あたし強いしー？ まあ兄さんも強かったよ。けど卑怯だねえ。っと、ここだよ」

良い香りのする露店市場。

あらゆる地方の食べ物が出品されている。

中には人間たちが開発した料理なども数多くあり、見れば人間が腕を振るっている姿も見かける。魔物と人間は戦時中ではあるが、美味しい料理を作るのならば見逃されるのだから。行列が出来ていた。

湯気を出す白い包み - シャオロンポ 小籠包が目当ての品らしい。

多くの魔物たちが並ぶ列の最後尾に二人は付くと、ローランはるんるんと楽しみに尻尾を振る。キリルも食べたことのない食材に想いを馳せた。美味は正義である。

ちなみに特待生とは学費が免除されるものである。優秀な種族や優秀な成績を残したもののみに与えられる栄誉ある制度だ。キリルもスライムの王族ということから一応特待生の末席ではある。

遙か彼方ほどに実力が上だるうローランは食べ物のごことで頭がいっぱいなのか、次第に縮まる列に一喜一憂し、とうとう順番が来たときに小籠包シャオロンポを残り全部指定した。キリルは代金を支払い、後ろに並ぶものたちの抗議の視線に辟易としながらローランを連れて近くにあるベンチシャオロンポに座る。

購入した小籠包はおおよそ三十個だろうか。一人で食べきれぬようなものではないのだが、そのうちから二個だけキリルに渡すと、残りはすべてローランのものになる。

キリルが口の中に小籠包シャオロンポを入れたら口の中が爛れるほどに熱く感じたが、ローランはそうではないようだ。熱さなど気にせずにくつくりと噛みしめて食べている。

(ああ、そういうえばこいつらは口から火を吹くんだっけ……)

熱がるはずがなかった。シャオロンポ 小籠包から漏れ出る汁よりも【ファイアブレス 炎の吐息】の方が何万倍も熱い。

黙々と食す傍ら、キリルは天を仰いだ。

人間界とは違う暗んだ空。分厚く黒い積乱雲が天に蓋をしているようだ。昼も夜もわからない魔界は人間界にい慣れたキリルにとって不気味なものだ。

「どうしたの？」

一食の恩があるからか。ローランは多少はキリルに気をかけているようだ。

いや、とキリルは首を振り、残りの一個を口に入れる。

「寝泊まりはどうしてるんだ？」

「寝るなんてどこでもできるじゃない」

「……ああ、野宿か。道中経験はしたが気持ちよくはないだろう？」
「普通っしょ」

キリルはようやくローランのことを掴めてきた。

確信はないので保留するが、ほぼ確実だと半ば諦めている。

「大変な人生送ってそうだな」

「ま、ね。でもしんどいほうが充実感はあるのも確か！」

「遅しいな」

そう言って笑うとキリルは「よし」と呟いて立ち上がる。隣で小籠包オロンポを食べているローランはびっくりしてキリルを見上げる。

「俺はここらでお暇するよ。どうせ明日から学校だし、会うこともあるだろう。一応俺も特待生だしな」

「兄さんも？ へえ、はあ、何か良い血筋かい？」

「隠し立てしても意味ないな。さっき名前は言わせてもらったけど改めて……」

キリルが着ているものは仕立ての良いシャツとパンツだ。首には金のチョーカーをつけている。位の高いものにしか身につけることを許されないチョーカーだ。

シャツのボタンに手を掛けると、一つ一つ外していく。いきなりな破廉恥行為にローランは目を剥くが、キリルは構わずにボタンを外し続ける。

第三ボタンまで外したキリルは胸元からネックレスを見せた。スライムの王族を表す刻印が刻まれたネックレスを。

「キリル」スライムプリンス　まあ名前の通りスライムの王子様やらせてもらってる。君のことを可愛いと思ったのは本当のことだけど、やっぱり強者と仲良くなりたいたいと思うのは弱者の常だね。俺は君と仲間になりたいんだ。強そうだしな」

「は、あ？ ええ？ どういうこと？」

「君はゴールドドラゴンだろう？ 魔界の守護竜と名高い魔物のはずだ」

「あ、あー、いや、あー、なるほど。まあ否定はしないけども、ねえ？」

ボタンを留めるとキリルはにこりと笑う。

ローランはそんなキリルに苦笑を返す。

「正直すぎて怖いなあ。あたしのこと何も知らないくせに」

「まあ答えはいつでもいいし、俺たちはもう友達だろう？ 同じ釜の飯を食った仲だ。何故なら小籠包シャオロンポは同じ釜で蒸すからな」

「……うまいこと言えてないから」

はあ、とローランは盛大にため息を吐いた。

渋々と言った体で蜂蜜色の癖毛のある髪をがしがしと掻いている。

そうして胡乱気にキツリウの顔を見上げると、はたまた嘆息した。

「あたしはローラン。種族名はない。だからゴールドドラゴンじゃないんだよ。それだけは言っとくし、あたしを仲間にしようものなら敵がけっこう増えちゃうよ?」

「まあいいんじゃないか? 人生はしんどいほうが充実するのは確かなんだし」

考えておいてよ、とキリルは言い残すとその場を立ち去った。

遠くまで歩いたときにキリルの耳に届いたのは何なのか。か細い声は力のないものだった。

「……うまくないから」

2・守ってくれ

2・守ってくれ

【学園都市パンデモニウム】は交易都市としての側面もある。故に宿泊施設は当然の如く発達していた。

清潔かつ整備された最新鋭のホテルに泊まり、キリルはのんびりとチエックアウトをして学び舎へ向かう。

本日が始業式。もちろんの如く空は曇天。神が祝福する陽気な光は魔界には降り注がず、湿度の高い鬱陶しげな暑さが漂うだけだ。

迷宮の奥深くで住み続けたせいか、太陽に焦がれる想いがあったキリルはやはりこのような空には気が滅入る。ここも同じなのかと淡い落胆がその身に宿る。

(さりとして気怠い空気を出すわけにも行かないな)

ホテルがある場所は学園都市の南部だ。

露天市場や商店街などが多く並ぶ東部からは少し離れてはいるが、【魔獣学園パンデモニウム】からはほど近くである。

南門から真っ直ぐに突き進む通りを道沿いに行けばそこはあり、登校しようとしている数多くの生徒たちを見れば道を違うはずもない。引率の教師だろうものたちもちらほらと見え、迷うことなどありえなかった。

すれ違うものたちは多種多様な種族。見たこともないものもいれば、キリルの住まう迷宮で門番をしていた下級兵士たちと同じ種族もあり、魔界でも強者と謳われる種族もいる。中には戦時中であるにも関わらず人間の姿もちらほらと見え、実に多岐に渡る人材募集をしていたことが窺える。

曇天のせいで光の薄い魔界だから、街燈にから放たれる魔力から

ホテル

は山吹色の光が灯されており、薄暗い景色にかすかな陽光で街を照らしている。その光は朝焼けによく似ていた。

昨日よりも曇っていてほぼ完璧に光が遮断されているための処置だろう。登校途中のものたちは物珍しげに街燈を注視し、空を飛んでいるものは間近から観察していた。眩しそうに眼を細めてきちゃつきゃと笑っているのは妖精種だろう。三人連れの姉妹らしきピクシーが虫翅を羽ばたかせておっかなびっくり街燈に触れている。

レベルの高い、実に行き届いた都市である。

道は舗装されており、道中の獣道のような土の地面ではない。雑草もほとんど生えておらず、街路樹まで植えられている。

街路樹は魔光樹。街燈の使用した魔力を吸収し、再び街燈に送り戻すという役割を担っている。一片もエネルギーを無駄にしない姿勢は素直に感心するものだ。

学校に近づくにつれ人は増え、急遽造られたのであろう屋台が立ち並ぶ。朝ご飯にしろと言わんばかりにあらゆる食事が置かれており、歩き食いをしているものが目立つ。

腕時計を見ればもうすぐ始業式が始まる時間なのだが、慌てる素振りのないものが多い。

魔界独特の文化や時間に対する考え方のわからないキリルは魅力ある品々からの誘惑を振り払い、とりあえずは学校へと直進した。

数分歩けばすぐに【魔獣学園パндеモニウム】へたどり着く。

正門には教師だろう多くの魔力を内包したものが立ち並び、元気に挨拶をしている。

元氣よく返事をする生徒と教師のやり取りはキリルが昔よく読んだ小説の中の風景のようである。

校庭に入ればキリルの住んでいた王宮とは段違いの学者が数多くあり、一周するだけでも一日では回り切れない広さなのがわかる。

その中でも一番無骨な 体育館なる場所へとキリルを含む生徒たちは誘導された。

木目の床に高い天井。見た目とは違い、頑健な造りなのだろう。

踏み締めればとても壊せそうにない丈夫さが足裏から伝わってくる。体育館というからには実技の練習をするのだろうとキリルはあたりをつけ、指定された鉄パイプの椅子を見つけて座り込む。

ほぼ空席だ。ほとんど誰も来ていない。

既に着席済のものたちはきよるきよると挙動不審気味に周囲を窺い、腕時計を見て、体育館の壁に翔けられている時計を見上げて首を傾げる。あと五分で式が始まるはずなのに三割くらいしか席が埋まっていないのはどうということだろうか、という疑問の現れだろう。キリルもちらちらと周囲を探ると、同じくきよるきよるしていた少年と目が合い、お互いに苦笑した。

鉄パイプの椅子は横並びにクラス指定になっているらしく、キリルのクラスは三組だ。その少年もキリルと同じ列に並んでおり、田舎から上ってきたものなのだろう。

「全然人が来ないな」

「全然来ないね！ 本当困るな！ いやね。僕だって早く来ようと思ったわけじゃないんだけど。規則ってあるじゃない？ あるでしょ？ だからさ。大事かなって。守るのは大事かなって思ってた。早めに来たんだ！ かれこれ一時間ここで待ちぼうけ！ 本当暇だよ！」

返事を期待して呟いたわけではないが、相手もどうやら暇をしていたらしい。

黒髪の上からはひよつこりと三角の耳が生え、硬い生地なのだろうオーバーオール尻からはふさふさの尻尾が飛び出していた。どちらもぴよぴよこと忙しく動かせて身振り手振りで感情表現豊かに口を開く。実に饒舌で元気が良くて人懐っこくて……阿呆そうだ。

今も聞いてもいないことをぺらぺらと喋りつつもキリルの顔色を窺う様は如何にも下っ端といった風情である。時折相槌を打てば大きな瞳をきらきらと輝かせ、尻尾と耳を過剰に揺らせて余計に喋り

だす。

どう見ても犬である。

適当にあしらいつつ時計を確認するが、式の時間はとっくに過ぎている。いつになれば始まるのだろうと思つて近くの教師に聞きに立とうとすると続々と生徒たちが登校してきた。おおよそ一時間の遅刻である。

「来たね！ やつと来たね！ 実は時計が壊れてたとかそういうオチなのかな！ 僕も君もどっちも時計が壊れてて学校も壊れてたのかな！」

「そうかもしれないな」

来訪する生徒たちの中に見覚えのある金色の鱗が混じり、自然とキリルの口角が釣り上る。

「さて、どう仲間に取り込むべきかな」

「仲間？ ねえ仲間って？ ねえねえ、仲間って！」

「ああ……うん、お前も仲間にするべきなのかな？」

気づけば隣にまで近づいてきていた犬っぽい少年の頭を撫でるとローランの方に視線を向けた。相手も同じクラスのように、少し離れた横並びの席で座つてキリルからの視線を受け流している。

反応のないローランから視線を外して壇上を見れば、マイクのテストをしている大柄の男がいた。

白髪に白髭の男は筋骨隆々。如何にも鍛え抜かれた身体だった。

「俺が校長だ」

端的な自己紹介だった。

「さて、諸君らは遠路はるばるやってきてくれたのだろ。多くの生徒は遅刻などという嘆かわしい痴態を披露してくれたが、僕は許す。寛大な心で許すでしょう。どのみち全員を入学させるなどという広い心は持ち合わせておらんぞな」

体育館内がざわめいた。生徒たちが動揺し、声を漏らしたのである。

生徒を囲むように体育館の隅で立ち並ぶ教師たちが一喝して動揺は収まるが、最初のようなお祭り気分は何処かへ消え去り、校長へ真剣な眼差しを向けている。

「筋力でもいい。知力でもいい。生まれ持った性質でもいい。何かしら秀でたものしか入学はさせたくないぞな。それほど時間に余裕はないし、我々は魔王様に“優秀な生徒を育て上げる”ように仰せつかつておる。故に無能はいらん。疾く去れ」

去るものがあるはずもない。

嘆息した校長が指を慣らすと、突如全生徒の目の前に二枚の羊皮紙と羽ペンが出現した。

「参加するものはそれにサインを……」

そこには『死亡承諾書』と『遺言状』が浮かんでいた。

隣に座る犬つぼい少年は震えながら羊皮紙を掴んでいる。羽ペンは浮かんだままだ。

見るからに戸惑う表情だ。蒼褪めた顔には恐怖が色濃く映っている。

「死亡承諾書ね……」

そもそもとしてキリルは国の未来を掴むためにこの場へ来たのだ。万が一にも死ぬなどということは許されないし、遺言を残すなど言語道断である。

しかし逃げ出すのも恥。結局人間に滅ぼされるだろう未来は変わらない。

瞑目し、想いを馳せる。

成功するメリット。失敗した場合のリスク。全てを照らし合わせて鑑みた結果、やはり答えは一つだった。

死亡承諾書に名前を記入する。

瞬間、光がキリルを包み込む。

『【^{ワーブ}転移

】の起動を許可します』
呪文による過負荷が本来ならば液状であるキリルの身体に重みを与える。

痛みにも目を閉じていたが、目を開けば見たことのない世界だった。周囲に流れる星屑の群れ。一つの扉に向かって身体が光となっていくような錯覚。行為呪文【^{ワーブ}転移】の効果だろう。どこかへと飛ばされているのだ。

頭痛を誘発する衝撃と共に扉にぶち当たる。

痛みを堪えて耐え凌げば、目の前に広がるのは荒野にぽつんと立つ大きな白亜の塔だった。

『試練の塔へ到着しました』

外壁を調べるもただの大理石。

殴って壊せるものかと拳をぶち当ててみるものの、^{千テル}魔力に包まれた結界のせいで外壁には拳が届かない。

どうやら扉のところだけ結界が解かれているようで、入る意外に手段はないように思えた。

いや、そうでもないか。

キリルは液状の身体を操作して人間から鳥類へと【シフト変身】する。羽ばたいて空を舞えばどこまで塔が伸びるのか確認できるというものか。空を飛びつつも塔の高さを客観的に計ろうとしたが、空を貫く勢いの塔に天井はありはしない。次第に雲まで辿り着き、そこにも結界が張られていた。どうやらゴールは中からしか無理らしい。

「あいたつ！ もう……何なのさこれ」

悲鳴を聞きつけて下を見ればローランが金色の髪を振り乱して地団太を踏んでいた。そのたびに地面に亀裂が走る。

キリルは【シフト変身】を解除して地面に降り立つとローランの肩にぼんと乗せた。返ってきたのは尻尾による痛撃である。

横つ腹を殴られたキリルは一瞬意識が飛びかけるが、どうにか根性で地面を踏み締めて耐える。

「……ご挨拶だな」

げっ、と見たくない顔を見たという表情を浮かべるローランを視界に納めてキリルは苦笑を漏らす。

意識を患部に集中し、急速に治療する。

すると息苦しさは消え、気軽に立てるようになるというものだ。体勢を立て直す。

「はてさて。ここでの出会いは何か作画的な何かがあるのかもしれないし、もしかしたらただの偶然かもしれない。しかし、人は良いことを偶に言う。ここで会ったのも何かの縁。一期一会と人は言う。やはり俺は君と友達になって協力し合いたいと思う。これはまさに運命じゃないか？」

「兄さん あー、キリルだっけ」

「そうだよ。ローラン。キリルが呼び辛いならキールと呼んでもいい。故郷での俺の愛称だ」
「キリル」

断ち切るような冷たい響き。
再びキリルは苦笑を漏らす。

その間にも続々と違うものたちがこの場へ降り立ち、その数は三百は下らないだろう。

ルールの説明はなし。あるのは目の前の塔一つ。

一人で進めるのも馬鹿らしい。

キリルは手を差し出した。

「君は俺よりは強い。だから俺を守ってくれ」
「図々しい！」

間髪入れず返ってきた言葉は至極最もである。

しかしキリルは真顔でじっと手を差し出したままである。

ローランはがしがしと乱暴に髪を掻き乱すと、俯いた。そして胡乱げな視線で窺うようにキリルを見上げるとすぐさま顔を背けた。また髪を掻く。

「あー！ つまり！ お兄さんは私の力が欲しいだけなんだ？」
「そうでもないけど、一番欲しいの武力だ。俺にはないからな」

こうしている間にも後から来たものたちが塔へと進み始めている。徒党を組むもの、独りで行くもの、実にさまざまだが、共通して言えることは『立ち止まっているものはない』ということだ。

じっと立って相手の様子を見ているものなどキリルくらいである。他者より先んじて行ったほうが有利だ。しかしそれを覆す何かをローランから感じ取っていた。

金がない。おそらくは友もない。家族すらいないだろう。恵まれない環境で育ったもの特有の弱者の空気。

王たるキリルは他者の空気に敏感だ。

人を統率するものは二つに分かれる。

“理解するもの”と“理解しないもの”だ。

キリルは前者である。善良な王となるべく教育を受けたが故だろう。後者は独裁者である。

「いいけどさ！ お兄さんは キリルは私を裏切らないのかい？」

「さあ？ 確約はできないけど善処するよ」

にっこりと笑ってそう言うのと差し出した手を払いのけられた。

(言葉の選択を誤ったか。安易な約束を嫌う相手に見えたんだが)

すると今度はローランから手を握ってきた。ぶらぶらと所在無げに投げ出されていたキリルの手に万力のような圧力が押し掛かる。

「じゃああたしも善処するよ」

解放されたとき、掌の芯はじんじんと痛んだ。

脂汗が出そうな痛みに耐えているといつの間にか荒野には二人きりになっていた。

ローランが急ぎ足で塔に向かおうとしているが、キリルはローランの尻尾を掴んで押さえた。

きゃんっ、と可愛らしい悲鳴をあげてローランは振り返り、キリルに抗議の視線を向ける。口元からは鋭利な牙が見え隠れしており、瞳孔は縦に裂け始めていた。

「何す」

「少し黙れ」

高圧的にローランに命じる。

困惑したローランは口を閉じてキリルのことを注視するが、キリルは瞑目して神経を研ぎ澄ませるだけだ。

耳の構造を犬に【変身^{シフト}】し、聴覚を限界まで高める。

突然襲い掛かる音波にキリルの眉間に皺が刻まれた。

耳に届いたのは絶命の断末魔。命の途切れる慟哭だった。

「なるほど。死亡承諾書などという不愉快なものに印を押させるわけだ」

「何？」

「竜は鼻が利かないんだっただか？」

「だから私は正確には竜じゃないんだって！」

「じゃあ何なんだ？」

ローランはふんと鼻を鳴らして顔を背けた。頬を膨らませて反抗的な態度である。

これ以上は言わないぞ、という頑なな決意を感じたキリルはローランを置いて策を練る。

塔の中は命を失うほどの危険が待ち構えている。鼻を【変身^{シフト}】して嗅覚を鋭敏にすれば鉄錆の芳香が鼻腔をくすぐる。

荷物として持ってきてきているバックパックを持ち出せばあるのは学園都市で購入した地図と食べ物くらい。武器になるようなものは一切ない。

強いて言えば武器は隣で不貞腐れる【魔界の守護竜^{ゴールドドラゴン}】くらいだろうか。

金色の鱗で守られた体躯。

その身に纏う神々しさすら感じる魔力の量は今まで出会った生物の中でも特筆すべき高さだ。肉体的な強さの裏打ちもあり、故に彼

女はキリルの知る限り最強の存在である。

偶然で手に入れた　ある意味最強の矛である。

ローランの力を用いればおそらくは塔の攻略など容易極まりないのだろうが、それでも対策はすべきだろう。

正直に扉を開いて塔に入ればおそらくは塔の番人がいるのだろう。キリルの鋭敏化された五感でひしひしと感じる敵の脅威。今も命の絶たれる不愉快な音が塔の内部から響く。

より明確に鋭敏化すればそれはすべて一階からのもので、上から聞こえるものはない。いや、もしかすると結界が音すらも阻んでいるのかもしれないが。

はてさて、キリルは腕を組んで考える。

ローランは隣で面倒臭げにキリルのことをじっと見つめているが、それを恣意的に無視して考える。

「筋力、知力、もしくは性質。それらをアピールするのは簡単だ。筋力に秀でていればそもそも門番を打倒すればいい。知力ならば門番の弱点を探ればいいし。性質が優れていればそれで打ち負かせるだろう。問題は……ああ、なるほど」

ローランが踏みしめて亀裂の走った大地。手をやれば容易に掘れる硬度だ。

座り込んで土弄りをし、ローランを見上げる。

「ここを掘ろう。おそらく抜け道がある」

「やだ。汚れるし」

拒否されて後、キリルは一人で穴を掘り始めた。

両手を鉄の硬度に変えてスコップにする。

さくさくと掘れていくのをローランが忌々しげに見下ろし、次第に手伝うようになった。

ローランが加わってから掘るのはほとんどすべて任せ、キリルは出てきた土を地上に放り捨てる役目を負う。

おおよそ一刻ほどで穴を掘り終えると、地中深くに塔の壁が見えた。

結界はなく、触れることができる。

試しに拳を振るえば簡単に壁は崩れてしまった。

崩壊した壁の先には燭台の蝋燭で照らされた道が広がっていた。

複合材で作られたセピア色の壁面と地面。直角に作られた通路からして誰かの手が行き届いているだろう。

(学校側のか?)

考えられる不都合が多い。

自分たちと同じ魔物が仮にも試験だろうとも命を奪うことは考えづらい。

ならば?

思考の渦に陥りかけたとき、硬質なもの同士がぶつかる甲高い金属音が響き渡る。

見れば突撃槍を腕を弾き飛ばすローランがいた。

ローランの先には無手の拳を虚空に翳す白金の騎士。

ぶおんと空間が揺らめく音が鳴る。

すると白金の騎士の手には何らかの勳章が刻まれた突撃槍が出現した。それはさきほどローランが弾き飛ばした突撃槍と同じもので、

【転移】の呪文が武器に宿っているのだろう。

敵は突撃槍を腰溜めに突き出し、ローランとその奥にいるキリルのことを睨み付けている。

兜は目元以外を覆うフルフェイス。鎧は全身を包み込み、魔力とは違う不可視の力を放っている。

それは闘気というもので、魔物では持てない生命力の根源であった。

「なるほど。人間もこんなものを作っているんだな」

ローランの前に立ち、腕で遮る。

ここは迷宮。

人間の生み出した迷宮だった。

3・ふざけんな

3・ふざけんな

神は戯れに人間を作った。

神は己の肉体の一部から作り出した愛玩物を寵愛し、溺愛した。

魔物よりも肉体的に劣る人間に肥沃な大地を与え、魔物は地下に押し込める。天の恵みは大地に遮られ、地下にある魔界には大地を浸透して零れ落ちる雫しか手に入らない。

僅かな資源を求めて魔物は彷徨い、奪い合い、殺し合い、そうして強靱な肉体と精神を手に入れていく弱肉強食の世界になってしまった。

弱きは残れないが故に強者のみが跋扈し、次第に知恵のあるものが生まれていく。

「我らは奪い合う。だがこれでいいのだろうか？ 極小の資源を取り合うくらいならばもっといいものがあるじゃないか」

そのものは空に蓋をする大地を指さした。

「あれを奪おう。我らは今こそ日の下へ！」

こうして魔物は地上へと侵略を開始する。

これが真実かどうかはキリルの与り知らぬところだが、現実問題として魔界は人間界をどんどんと攻略し、今となっては大陸の半分を領土にすることに成功している。

原因はわかつてはいないが、空は分厚い雲に覆われて太陽の恵みを受けることはできない。魔物側の言い分からすれば「神が我々を嫌っている」からこそ封印を掛けて太陽を遮っているのかもしれない

いと考えられるのだが、さりとしてそれが本当かどうかは確証を得ることはできない。

この話を鑑みるに、要するに魔物と人間は闘っており、存在自体を憎み合う程度には争う理由があるということである。

「何故ここに魔物モンスターがいるというのだ！」

眦を吊り上げ、野太い声で激昂するのは洗練された光を纏う騎士だ。

硬くて柔らかい相反する性質を持つ白金は希少価値のある金属だ。そんなもので造られた鎧をつけている。

突撃槍には呪文が刻まれている。エンチャント加護というのだが、これにも様々な触媒が必要となり、製造工程においては匠の技術が必要とされる。

前述を鑑みるに騎士の位が高く、装備に見合う実力があるのだからことは容易に想像できるというものである。

強烈な殺気を放つローランに背を向けて押し留めるのは多大な精神力を必要とするものだが、キリルは無駄に争うということはない。

この騎士に直接的な恨みはないのだ。

懇願するようにローランに目で訴えかけ、騎士と対峙する。

もちろん殺すという選択肢は頭の隅に置いて。

「質問に答える前に矛を収めてくれないか。こちらとしては別に争う必要も意味もないし、まずは話を聞いてほしい」

「戯言を！」

声に宿る意思は色濃い闘志。

先ほどの質問はこちらがここへ来たことに対する意図を聞き出すものではなく、単純に何も考えずに発言したものだと言わねばキリルは理解

する。

直情的な馬鹿。手に負えない輩。

騎士の評価がキリルの脳内で断定された。

燭台に灯される蝋燭の焰が薄暗い通路を照らしている。時折吹く微風で炎は揺らぐ。

交渉というものは明るい場所です。やったほうが成功率が上がるといふもの。暗い場所だとしても警戒心が顕わになる。

何に対するものかはわからないが、怒りを滲ませる騎士に対してこみ上げそうになる憐憫と侮蔑の感情を抑え方策を練る。馬鹿を相手にする場合は理論ではなく感情に訴えるべきなのだが。

今にも殴りかかってきそう。というよりも既に一度奇襲してきている相手だ。何時また攻撃してくるやもしれない。

もういいか。

背後で膨らむ濃厚な殺気を抑えるのも阿呆らしくなり、遮る腕を引くことを考えていたときだ。

「騎士のおじさん、勇者はここにいるのかい？」

出会ってまだ二日のローランの声はだいたいにして張りがあり、快活なものだった。

それなのにこの時の声は地獄の底から漏れ出てくるような低く響くものである。

驚きに眼を開いて後ろを向けば、射殺さんばかりに敵を見るローランの姿があった。

ローランの柔肌は竜の鱗がびっしりと生え、牙と爪が伸びている。瞳は縦に裂けて闘争本能剥き出しであり、戦闘の体勢へと移行している。今にもその爪で切り裂き、牙で噛み砕くという選択肢を実行しそうだ。

それなのに瞳には理性の光が見え、より一層恐怖を掻き立てる。

「やはりそれが貴様らの目的か、魔物。争うつもりがないなどと笑わせる！」

「いるのかい？」

「魔物と話すつもりはない。早々に死ね」

「いるんだね。そりゃあいいや。好都合だなあ……。試験なんてそつちのけでこつちをクリアするほうが余程単純で分かり易いね。そもとして試されるなんて性に合わなかったし、母さんの遺言とは言え……。団体行動なんて嫌だったんだ。馬鹿らしい。頭で考えることなんて嫌だったんだ。面倒くさい。力を振り翳して大小関係なくぶち壊す方がやり易いね。だからあんたも壊せば少しは口が軽くなるのかな。少しは口の利き方を覚えるのかな？ まあどちらでもいいよ。手足？ぎ取って勇者の居場所を告白させてあげるよ」

ローランはキリルを押し退けて騎士の前に立つ。

揺らぐ焔に照らされるその顔は醜い感情で一杯だが、冷ややかな双眸が現在冷静に事を運んでいることを否応なく理解させる。

明確な理由に基づく明快な殺意。何がしかの発端を抱えていることは間違いない。

魔物が人間を憎む理由など星の数ほどあるだろう。神の寵愛を受けているというだけで憎む者もいるくらいだし。

母の遺言と言っているからには親関係のことなのだろうが、それにしても、ゴールドドラゴンから直接の恨みを受けるなどどれほど大物の勇者なのだろうか。

数多くいる勇者を頭に思い浮かべている内に戦闘は開始された。

通路は狭い。肉体の能力が過剰に高いゴールドドラゴンの能力を余すことなく使うには狭すぎる。

故に二人は真正面からのぶつかり合い。

空気を震わせる甲高い金属音が耳朵を侵す。

たった一度の接触。これだけで勝負は決着した。

結末は単純明快なものだ。

人間の持つ特性として闘気^{オーラ}というものがある。

肉体に絶大な強化を施し、それは武器にも宿って攻撃力を増す。肉弾戦に適した神の祝福だ。そして魔物を殺すために研究し、研鑽した技術は数千年も前から蓄積されたものだ。その身に技術と武器と闘気を宿し、これらを用いて人間は魔物を屠る。

裏を返せばここまでしなければ人間は魔物に勝てない。殺せない。この騎士はおそらく強かったのだろう。突撃槍を突き刺すように突進する姿は堂が入っていたところから修練は怠っていないのだろう。踏み締めた地面は衝撃に耐えれずに沈没していたのだから、きっと強力な肉体も持ち合わせていたのだろう。きっと弛まぬ努力に裏打ちされた実力があつたはずなのだ。

人間の中では。

結果としては努力は実を結ぶことはなく、ローランの技術も修練もしていないだろうただの体当たりを受けて地面に叩きつけられてしまったが。

「ぐ、まだだ……」

騎士は血反吐を撒き散らしながら、気概のみで立ち上がろうとし、腰が碎ける。

突撃槍を構えていた右腕は肩の付根から吹き飛び、片目は陥没している。白金の鎧は罅割れ、碎けている。碎けた鎧の残骸が身体に突き刺さり、針鼠のような状態だ。

圧倒的な性能の差。

このような状態に陥っても折れない心をキリルは素直に称賛したところだ。

けれども勝負にすらなっていなかった。

残った腕を虚空に翳し、槍を召喚する。それを支えに立ち上がるうとするが、残った片目では見えないのだろう。罅割れた突撃槍は

穂先から砕け、騎士は再び地面に伏す。

「まだ、まだだ……。僕はまだだ……。まだやれる……。やれるはずだ……。僕は、僕とレグゼルは幾多の魔を討ち滅ぼした……。その経験から言えば、この程度の傷、かすり傷にすぎぬ……。まだじゃ……」

虫のような声で自分を叱咤している騎士はキリルからすれば哀れな存在に見える。

多少の憐憫を胸に口を開こうとするが、キリルの言はローランの行動で潰された。

「まだ元気なんだ？ かすり傷なんだ？ なるほどなるほど、じゃあもう少し壊そうか」

必死に立ち上がろうと片腕を支えにして努力する騎士。

その様を冷ややかに見下ろしていたローランは騎士に一歩近づくと騎士の手を踏み砕いた。

骨の折れる音と騎士の悲鳴が迷宮に響き渡る。悲痛な叫びが耳朶を打つ。

残虐な行為だ。敵を蹴る行為だ。

どれほど憎んでいるのだろうとキリルはローランの様子を窺うが、能面のように無表情な顔があるだけ。

敵の慟哭を聞いて醜悪に口角を吊り上げているのなら復讐として甚振るのを愉しんでいるのだろうと思えるが、機械的に騎士の手を踏み砕いている。当たり前のように踏み潰している。

騎士に対して何の感慨も抱いていないようだった。

「ねえ、おじさん。少しは口が軽くなった？ ぺらぺらとそっちの事情を話してくれればあたしとしても助かるんだ。何ならおじさん

は見逃してもいいよ。別に恨みなんてないし。だからさ。もういいでしょ？ 我慢することなんてないよ。おじさんは頑張った。誰が認めなくてもあたしが認めてあげる。だからさ。小鳥みたいに囁いてあたしの機嫌を取ろうよ。そうすれば命は助かるよ。やったね。誰も損をしない。全員が得をする素敵な選択肢だ。断る手はないね！」

ローランは騎士の顔の隣に座り込み、いつそ優しい声音で諭すように話しかける。

目は笑っていなかった。

「……こと……わる」

「じゃあもういいよ」

すつくと立ち上がると、ローランは騎士の頭を踏み潰した。

絶命の痛みを訴えることすらなく騎士は死んだ。

キリルはその姿に一抹の恐怖と 意外なことに、ローランに対する絶大な信頼を覚えた。

使えると思っただのである。

復讐を行うならばどうしても情報が必要だろう。それらの情報をローランより先に入れることさえすれば、彼女を利用することは容易である。彼女の信頼を勝ち取るのは容易である。

やはりローランはキリルにとって鴨だった。

騎士だった死体^{もの}を見下ろし、キリルは白金の鎧と突撃槍を回収する。

剥ぎ取られた騎士は素っ裸になり、このときようやくローランは緊張した無表情から一転して噴出した。

「酷いことするね。あたしでも死者に鞭は打たないよ」

「白金は金になる。魔法^{エンチャント}付加の武器も壊れているとはいえ希少価値

の高いものだし、何かと買い手はあるだろう。死者に遺すにはあまりに惜しい」

「お金は必要だね。村を出てつくづく知ったよ。何にしても金がいるってことをね……」

「どのみち俺は金には困っていないがな。これは念の為だ。何なら売れた金は渡そう」

「感謝！ つと、ところで……」

言い辛そうにもじもじとローランは身体をくねらせる。

隣に惨殺全裸死体があるから和む要因にはなり得ない。相当にシニールな光景である。

「聞かないわけ？」

「ああ、勇者に個人的な恨みがあるんだろう？ それさえわかれば他は別にどうでもいいな。話したいのなら聞くが？」

「いや別に話したいわけじゃないけどね……」

「正直ここまでぼろぼろに殺す必要はないとは思ったが、まあ人間なんてものは我が同胞を幾多も殺害している家畜以下の厄介な害虫でしかない。存在殺虫させようとも何とも思わない」

「……人間が嫌いなのかい？」

躊躇気味にローランは問う。

先ほどまで人間の騎士を襤褸雑巾にしていたものとは思えない、

動揺の浮かぶ表情。

どんな答えを求めているのか。

キリルはじつとローランの眼を見据え、思考する。が、結局は本音をぶつけることにした。

「別に。俺に敵対する奴は人間だろうが魔物だろうが神だろうが全員嫌いだ。役に立つのなら人間でも好きになれる。種族毎に差別す

る気はない。区別はするがな」

ふうん、と興味なさげにローランはそっぽを向き、これで話は終わりだと言わんばかりに歩き出した。

無音の通路に二人の靴音だけが響く。

入り口として穴を開けた壁からそれなりに歩き、曲がり角をいくつか曲がる。

当て所なく進んでいるのだろうローランは時折鼻をひくつかせて歩いているが、キリルは頭の中で進んだ路を覚えるためにマップングしていた。迷宮育ちだからだろう。生来の癖である。

一定の距離ごとに分かれ道があり、それは何かの規則性を持っていた。人を迷わせるための手口。

燭台の蝋燭の明かりも常に一定で、誰がいつ手入れをしているのか気になるところだ。歩いていればそのうち蝋燭係とでも出会えるのだろうか。

随分と歩き、答えの見えない通路を歩き続け、いい加減鬱陶しくなってきた。

キリルはローランに一旦戻ることを提案するとローランも渋々ながら承諾した。

「どうするの？」

ローランの問いかけに言葉を濁し、出発地点へと辿り着く。

そこには全裸死体と、隣に膝をついて死を見送る人間の少年がいた。その少年は死体を仰向けにし、残った目を閉じさせている。

抜けるような銀髪だ。

蒼を基調とした節々に金の刺繍を施した士官服を身に纏い、腰には鞘に入った騎士剣が差されている。

先ほどの騎士とはどこか毛色が違った。

何処と言われればキリルも言葉に窮するが、どうにも何かが違う

のだ。

「君たちが殺したのか？」

すつくと立ち上がり、キリルたちに背を向けたまま少年は問う。

透き通るような 耳心地の良い声だった。

振り向けばに凄絶な美貌が顕わになる。人間の女ならば十人見れば十人ともが「色男」と評するだろう少年。

立居振る舞いには実力に裏打ちされた余裕もあり、状況を冷静に洞察している知性もある。

恫喝することもなく、キリルとローランを観察している。

理屈でも何でもない。キリルにはわかった。

こいつは勇者だ。

「否定がないのなら肯定と受け取る。同胞を殺した者は殺さなければならなくてね。それが魔物となれば釈明の余地もない」

強大な闘気^{オーラ}。この場を支配している、この場を包み込んでいる圧倒的な闘気^{オーラ}。

キリルは気づけば一步退く、逃げることだけを考えていた。

当然ローランもそうだろうと見てみれば、青筋を立てて怒りの形相を浮かべている。

「あんたが勇者かつ！」

「ん、そうだけど。人にも魔物にも勇者と呼ばれるね」

「あんたが……！」

気炎を吐き、ローランはキリルの隣を走破して勇者と名乗る少年に突進する。

怒りに任せたぶちかまし。普通ならば攻撃手段にすらならないそ

れは竜の肉体能力があつて初めて殺人的な攻撃へと変わる。

全力の疾走は衝撃波を破つて勇者へと到達し、何の技術もない振り上げた拳となつてぶつかつていく。

音速を越えた加撃。正直なところキリルには見えないほどのそれ。気づきは肉の爆ぜる音とともに。

ローランの拳は勇者の掌に受け止められ、握り潰されていた。

苦痛に呻くローランのことを勇者はしげしげと観察している。自分に刃向う敵を見るというよりは、見知った者を見つめるように。

そんな勇者をローランは残った腕で殴りかかるが、そちらも受け止められて潰される。

先ほど暴威を振るつた者とは思えない弱弱しさだった。

「ああ、君は……そうか」

ローランの腹を蹴り飛ばす。

苦痛に支配されたローランは地面をのた打ち回った。

ところどころ鱗が生え、鋭い爪と牙、尻尾と羽があるがローランは人間から見れば少し奇怪な姿をしている少女だろう。少女が痛がるのは普通の神経ならば心が痛むのだろうが、勇者はにこにここと嗤いながら見下ろしていた。

得心がいった、と満足げな笑みである。

動き回るローランの髪を掴むと勇者は自分の目線の高さまで持ち上げる。痛みに歪むローランのことなど興味なさげに、ぞんざいに

「なるほど。実によく育つた。でも僕は少女には興味がなくてね。もう少し育つてから相手してあげるよ」

ぎりりと齒軋りの音色がする。

ローランのものだ。

激痛を抑え込み、勇者の腹に蹴りをぶち込もうとするが、受け止

められて膝を折られる。けれども心は折れないのか、勇者の頬に唾を吐き捨てた。

元気だね、と勇者はローランの顔面に拳が撃ち込まれる。

鼻は折れ、血が飛沫が宙に舞う。だが、ローランは勇者を睨みつけたままだ。

「ふざ……な」

「ふざ？」

「ふざけんな！ ふざけんな！ ふざけんなああ！！ 殺す！

殺してやる！！ あんたのせいで……お前のせいで……あたし達は苦労したんだ！ 全部勇者のせいだ！ 臍物ぶちまけて、脳漿晒して、この世に絶望しながら詫びて死ね！！！！！！」

「無理だろ。君、弱いし」

勇者はローランに興味を失ったようで、キリルの方へと投げ捨てた。

放物線を描いて飛んでくるローランをキリルは優しく受け止める。キリルは助けることなど考えず、ただただ現状を見守るだけだった。

何故なら勝ち目がないから。

「それにしてもあの人も面白いこと考えるなあ。こんなところに生徒を放り込むなんて……いや、こんなところだからこそか。因縁ある相手を運んでくるあたり実に性格が悪い。いやそれは僕もか。魔物に対する加虐は誰にも咎められないから嬉しいし、やめられないね。まあだから勇者なんてやっているんだけど」

愉快気に口角を吊り上げるそれは勇者と呼ばれるもの。

魔物にとっての大敵で、その中でもこれは上位に入る者なのだろう。

自然と足が竦む。

「まあ君は帰りなよ。今度相手してあげるから」

勇者はキリルとローランの方へ手を翳すと一言だけ呟いた。

「送還」

身体が光に包まれる。

試練の塔へと送り込まれたときに感じた浮遊感。

そのときと同じ光。

抗えない類の力だと察したとき、キリルは静かに瞑目した。

「くそ！ くそ！！ くそおおお！！！」

ローランの憎悪が虚しく響く。

いつもは分厚い雲で覆われている空。

今日は珍しく、雲間から光が差し込んでいた。

仰向けに太陽を見上げる。倒れたまま、見上げている。

隣には泣き咽ぶ少女がおり、声を掛ける気力もない。

『【勇者との遭遇】を果たしました。試験を合格とします』

機械音が脳裏に響くが、返事をする気も起らない。

冷える地面から背を離し、立ち上がる。

気づけば更にもう一人、飄々とした青年がこちらを見ていた。

血塗れの衣服に腰には鞘入りの人間が好んで使う刀という武器。

魔力を感じず、人間の纏う闘気を纏っている。

好戦的な空いだ。

頭の中を即座に切り替え、キリルはその者を見たが、すぐに力を抜く。

敵意はなかったからだ。

「かはつ、全員殺したと思ってたんやけど生き残りがいたんやなあ？ おい、生き延びちゃった？ てか穴掘ったんお前？ なんっつか、かなり奇をてらうっつか、なんっつかさあ！ おい、聞いてんの？」

「聞いているよ。塔には番人がいてそいつが生徒を皆殺しにしているんだな」

「わいは門番ちゃうけどな。せやけど殺したのはわいや。何せこいつらライバルになるわけやん？ ならもうそれは敵やろ？ 殺した方が早いっつかさー、撫でたら死んじやったっつかさー。わかるやろ？ すぐ死ぬよな、魔物あんならって」

「……どうかな。隣にいる奴は殺しても死ななそうだが」

ローランを指さす。

血を流して倒れ、泣きじゃくる少女を見て「うへえ」と男は嗤う。

「悪趣味やねえ。あんたがやったん？」

「俺じゃない。俺じゃできない」

「そーかい。あんた弱そうやもんなあ」

男はじろじろとキリルのことを見る。

ここまで不躰に見られることもないキリルは苦笑してしまった。

「まあ君の方が強そうだ。俺を殺すのか？ 抵抗はさせてもらうが

……」

「や、別に殺すつもりはないで。もう試験は終わりやろ？ 何せ合格って通知がココに来たし」

とんとんと男は自分の頭を小突いた。

「わいの名前はクサビ。しがない侍や。あんたは？」

「キリル。こっちはローラン。どっちも人間に負けてきたばかりだ」

「ほうか。そりゃ災難やなあ」

けらけらとクサビは嗤う。血に濡れた黒い着流しを揺らして。

『【^{ワープ}転移】の起動を許可します』

そうして三人とも再び光に包まれ、この場を去ることになった。

試験の塔 受検者数五百八人。

死亡数五百五人。

合格者一人

クサビニイリヒサ

特例の合格者二人

キリルニスライムプリンス

ローラン

以上

3・ふざけんな(後書き)

一応これでプロローグ終わりです。

あくまで物語の説明とキリルとその他の出会いに終始しました。
次からは学園生活に入ります。

1. よろしく頼む

【学園都市パンデモニウム】の校舎で行われるカリキュラムの目的は“優秀な兵士を作ること”に終始される。

身体能力の向上を図り、魔物であれば魔力キテルの運用に関する個々人に適したやり方の模索、人間であれば闘気に関することになる。そして先代から伝えられる武器で最適なものを探し、その武器に関する技術の習得を目指す。もしくは種族による性質の研究、現在まで考えもつかなかった応用法の模索 為すべきことは多い。

カリキュラムは二つ 講習制と師弟制である。

講習生は簡単に言えば自分で授業を受け、自分でカリキュラムを考え、自分で行動する あくまで教師陣は助言をするだけの立場であり、すべての決定権は生徒自身にある。

一方、特待生は全くの反対である。授業は全て指定され、カリキュラムは考える余地など与えられない。食事から睡眠時間、全てを師となる教師が決定し、その教師の研究の対象にされることとなる。教師の目を惹くことのない凡才では受けられない制度であり、最低限“特殊な何か”を持っていることが条件となる。

幸か不幸か、キリルはどこぞの教師に興味を持たれてしまったようだ。

試験を終えたその日、校舎に送り飛ばされてから入学証書を受け、他の生徒と一緒に教師に引率されて学生寮を案内されていた。

石造りの建築物である【学生寮オデッセイ】は八階建てであり、一階は食堂や共用の温泉があり、娯楽施設が設置されている。二階から八階が学生寮であり、階毎に三人部屋が四十室連なっている。今回の試験の合格者は一万超の中から選ばれた三百だけであり、自宅からの通学者もいることから二階と三階だけが使用されることとなった。

キリルが連れられたのは二階の中央付近にある一室。独りのルー

ムメイトと顔合わせをし、荷物の整理をしながら自己紹介をしようとしていたときである。寮内に流れる大音量の放送でキリルの名と他の数十名の名が呼び出しを受けた。

呼び出された先は一階の食堂であり、簡素なテーブルに備え付けられている固定された椅子に座して待ち受けているのは屈強な魔力を漂わせる教師達だった。

「特待生　ですか」

制度の説明を受け、キリルが最初に口を開いて言った台詞である。目の前に座るのは身体のラインをはっきりと浮かばせるタイトなスーツを着た妖艶な美女だ。

メリハリの利いた大人びた身体は成人男子ならそそるものなのだろうが、生憎とキリルはスライムである。そういつた性欲とは無関係なところで生きているためあまり効果はない。

成熟した美貌に笑みを浮かべて「そうよ」と頷いた。

「種族はスライムよね？　人間界に派遣されたせいで魔界ではスライムがとても少ないの。研究材料が少ないと言い換えてもいいわ。そんな中、スライムの中でも希少種の王族が来ると言うじゃない？

他の教師たちはドラゴンや人間の“達人”、他にも狂鬼オーガや牛頭鬼ミナタウロスなどの鬼種、人狼ヴェアウルフや有翼人などの獣人種に熱意を注いでいるみたいだけどね。私は違うわ。様々な毒を保有するバブルスライム、溶解液を有するマグスライム、鋼の強度を有するメタルスライム、他にも融合や他生物の変身する能力　浪漫溢れるじゃない！　一つ一つの能力は羨みたいなものだけど、複合すればきつと最強になれるわ！　だからこそ！　私が貴方の能力を徹底解剖して実践に実践を重ねて成果を上げてみせるわ！」

身振り手振りで見せしめるとは裏腹に子供のよように目をきらきらさせな

がら美女は語る。心底キリルの身体をいじくり回したいのだから、手をわきわきと下品に動かせながら。

自分の種族を褒められて悪い気はしないキリルだが、内心ぞつとしない。生きた心地のしない状態である。

そんなキリルの態度を察したのか、美女はごほんと咳払いをする。

「とまあ語らせてもらったわけだけど、自己紹介がまだだったわね。私の名前はレームン・キリクトラス・リッチイ。名前の通り死霊の長であるリッチイの娘よ。まあ陰気臭くてカビ臭い辺獄リンボから逃げ出して地上にできたここに来させてもらっているだけだね。とりあえずは私と組む場合のメリットとデメリットだけ話させてもらうわ」

キリルは続きを促した。

「まずはメリットから。私はリッチイの出だから死霊術ネクロマンシーなどの死者を操る術に長けているわ。四大元素を操る精霊術エレメンタルもある程度は修めているし、魔力関係エテルの事ならだいたいことは教えられる。貴方に適性があるかどうかは置いておくとして、私はそれらのスキルに関するノウハウがあることだけはわかっておいて。もちろんスライムに並々ならぬ関心があるから情熱的に貴方に取り組むことになるわ。まあこれはメリットかどうかは知らないけどね」

レームンはぱちんと指を鳴らす。

するとレームンの頭上には火の玉が出現する。ウィルオウイスプと呼ばれる鬼火の類だ。それらが群れを為し、踊る。

他にも次々と水や風、電流などが宙を舞う。

同時にいくつもの作業を並列的に行うのは並大抵の技術ではできない。魔術に関する知識がほとんどないキリルでもレームンが戯れにやっている幻想的な遊びが高等技術に類するものだということは一目で看破できた。

もう一度指を鳴らすとそられは全て消えた。

「さて、次にデメリットなんだけど　私は非力よ。武器の扱いなんてわからないし、武術なんて以ての他。もし仮に興味のある武器や武術があるのなら専門の教師を紹介するくらいのことではできるけど、私自身は全くの無能よ。人間が魔界に造った前線基地　迷宮って言うんだっけ？　そういうところにも潜ったことはないし、対魔戦闘ならそこそこ経験はあるけれど、対人戦闘は皆無と言っていいほど無経験よ。仮に戦闘の知識や技術が欲しいのなら私と組むのはお勧めできないわ。残念なことだけどね」

「……そうですか」

「ここまで言っておいてなんだけど、結局決めるのは貴方自身よ。私を選択するもしないも自由。できれば選んでほしいとは思っただけね。チャンスすら与えられずに終わることほど虚しいことってないもの」

そう言っただけでレームンは立ち上がるとばちんとウインクをして「じゃあね。考えておいて」とその場を後にしようとしたのだが、キリルが手を出してレームンの腕を掴んだ。

レームンは驚いたように振り返ると、キリルは「すみません」と頭を下げつつもじつとレームンの眼を見る。

「決めるにしている情報がありません。私は　　と柄じゃないな。先生が本音で語っているんだから、俺も本音を言っよ。俺はあんたを信用していない」

「当然ね。会ったばかりで信用も何も無いわ」

「メリットもデメリットもどちらも興味のないことばかりで決めかねる。俺は一族の命運を賭けてここへ来た。求めるのは結果だけだ。あんたは以前からスライムに興味を持っていたというふうな言い方をしていたな？　ならば具体的に聞きたい。あんたは俺に　　スラ

イムという種族にどういう期待をしている？ 何を求めている？
希望的観測でもいいから研究の展望を聞きたい」

レームンにはやりと笑った。悪戯を考えているような悪戯鬼の目である。

「面白いものがあってね。スライムの性質を私は研究したことがないから出来ると言いつけることはできないけど、試す価値のあるものはあるわ」

ついてきて、レームンは食堂を出て、玄関を潜って学生寮を出る。キリルも後をついていくが、曇り空な上にもう夜である。学生寮と校舎を繋ぐ通路には街灯が照らしているとは言え、足元が覚束ない。

光の外は漆黒であり、歩いたこともない場所だから土地勘もなく、へらへらと嬉しそうに笑うレームンについていくのみ。

次第に歩く速度は速まり、レームンはスキップになっていた。よほど楽しいのか、辿り着いた先は一個の家だった。

「私の研究室よ。寝る場所も兼ねているけどね。とりあえず入って」

木造建築のロッジハウス。

柔らかな木目でできた室内は暖かな雰囲気で、如何にも女性の部屋と言った感じだ。

案内されたの先は地下に続く階段で、ゆるりと降りていけばそこは研究室だった。

冷えた空気の部屋の中には大きな試験官の中に漂う見たこともない生物があり、適当に放り出された奇怪な技術で造られた道具が散らばっていた。興味を募らせるものばかりである。

その中からレームンは一つの道具を取り上げるとキリルに差し出

した。

鉄でできた長筒のようなもの。握る場所には滑り止めのグリップがつけられ、人差し指あたりには起動スイッチなのだろう引き鉄がある。

何だろうこれは、としげしげと観察しているとレームンは壁にある的のようなものを指さした。

「あれに向かって筒を向けて、その出っ張りを思い切り引いてみて」

とりあえず引いてみると、凄まじい爆音と反動が同時に来た。

驚きに目を見開き、ぎよっとしてレームンを見るとけらけらと晒っていた。

そして次に筒の向いている方を観れば的の描かれた壁には穴が出来ていた。

筒からは白煙が昇り、触れてみれば熱を持っている。何かがここから発射されたことはキリルでもわかるのだが、原理がわからない。しげしげと道具を見ていると、レームンはキリルからそれを取り上げる。

多少むっとするのも仕方ない事か。それを見てレームンはより一層笑みを浮かべた。

「銃　　と言ってね。人間たちが最近発明したものよ。弓を多少コンパクトにして狙いをつけやすくして威力を上げて……射程が短くなったものね。難点は技術的に大量生産ができないことと弾丸の製作が一部の職人にしかできないから多用できないという点ね。それにまあ湿気しているところでは使えないし、不都合も多いわ。未だに流行っていない原因ね。湿気が多い迷宮や魔界には適していない武器なのよ」

指を立てて自慢げに語る。

要するに何が言いたいのか。素晴らしい武器だということはキリルにもわかったが、その先が見えない。

「で、この銃という代物はほとんど鉄でできています。中にはいろいろなパーツが含まれてるけれど、すべてスライムの変身能力で賄えるはずだわ。弾丸も鉄だから変身できるし、問題は火薬なんだけど……偶然にも私は精霊術が得意なの。火薬の代わりに体内で精霊術で火の爆発を起こせば全て解決するわ。もちろんある程度の習熟は必須となるからいきなりこんなことを出来ないと思うけれど……」

「……なるほど」

「この銃っていう武器はね。今最も人間界で注目されているものなの。けれど難点は多くてね。けど貴方の変身能力があればそれらは解決できるし、魔術との融合で更に向上が見込めるわ。まさにスライムのためにあるような武器と思わない？」

腕を広げて仰々しく語る。

これがレームンの希望的観測に基づく展望か。

「他にも毒素の有効的な調合の仕方なども研究したいわ。溶解液の強化もできるだろうし、もしかすれば近接戦闘に耐えうるような適した変身もあるかもしれない。私は全身全霊を賭けて貴方をサポートするわ。もちろん私の研究のためにするわけであって、貴方の都合など関係ない。つまり私は相棒として貴方を求めているの」

レームンはちらりとキリルの目を見つめる。

「満足とまでは行かないが、なるほど。これは素晴らしい。もし銃とやらを模倣できるようになればメタルスライムたちが一気に地位を上げることになるだろう。今は硬いだけの奴らだが、誇らしげに前線に向かうようになるだろう。想像するだけで頬が綻ぶ。嬉しい

ものだ」

「貴方の希望に沿う可能性はあったかしら？ 私は貴方の相棒に選ばれるかしら？」

そうだな、とキリルは口籠る。

あらゆる可能性を考える。

おそらく自分に興味を一番持っているのはレームだろう。

食堂に呼び出された生徒はおおよそ六十。そのほとんどがレームが言っていた高等種族や戦闘種族ばかりだ。スライムなどという戦闘に適していない劣等種族と呼ばれるものは自分だけだ。

講習生の制度にも若干の興味はあるが、それにしてもこのような銃などというものはキリルは存在すら知らなかった。きっと希少なもののだろう。普通の学生生活では縁すらなかったはずだろう代物だ。

間違いのないこと。

レームはキリルにとってある程度は役に立つ。後ろ盾としても、知識にしても、それらはきつとキリルの背を押すものだろう。

「カリキュラムなどは俺の希望はある程度聞いてもらえるのか？」

「希望？ まだ授業の日程とかは出てないけれど、何か興味のあることでも？」

「……歴史に興味があつてな。魔界史は是非修めたい」

「それくらい要望なら問題ないわ。私と組むのなら私の言う事は聞いてもらわないといけないけど、それでもある程度の自由はあるわ」

「じゃあ……そうだな」

キリルは腕を差し出した。

「よろしく頼む」

「任せて！」

レームンは満面の笑みでキリルの差し出した手を握った。

二人の契約を表すものである。

ここにキリルの特待生としての道が決まったのである。

銃を模倣するための変身能力の向上　そのための練習法を具体的に語り合うこと一時間、随分と時間が経ってしまったので一旦キリルは学生寮へと返され、次の日から再び授業のカリキュラムを作成する運びとなった。

初日から一か月の間　レームンの言のよると授業の見学に終始されるらしい。

自分の進むべき道を一か月で考え、適した授業を選んで実施する。自由選択制を主体としたものである。教師は常に生徒に採点され、如何に生徒の心を掴むかが鍵になる。故にキリルとレームンには一か月の時間が与えられており、他の生徒もそれは同じだ。

おおよその授業の種類を聞き終え、頭の中で反芻しながら学生寮へと帰り着いたときには食堂にはほとんど誰もいなかった。

残っているのは多くの教師にひたすら話しかけられている　おそらくは引く手数多なのだろう生徒だけ。

その中に昨日知り合ったばかりの自称侍であるクサビと自称ゴードドラゴンではないローランがいた。

周囲には多くの教師を侍らせ、実に面倒くさそうに対応している。

「だからあたしは別に講習生でいいって言ってるじゃないか！　身体いじくり回されるなんて嫌だし、それに授業すら受けたことないのに決めるなんて無理だよ！　無理！　いい加減放っておいておくれよ！」

「わいは剣術を極めたいんや！　わいより強い剣使いやないと絶対に就かんからな！」

大変な想いをしているのだろう。

声を掛けることをしばし考えたが、面倒事に巻き込まれるのは厄介である。

そのまま階段を上がって自室へ向かい、団欒しているルームメイトに迎えられることとなる。

「俺の名前はキリル」スライムプリンス。名前の通りスライムの王子様やらせてもらってる。よろしく頼む」

同室のものは入学式で会った犬っぽい少年だ。どうやら一人は出かけているらしい。まだ会ったこともない相手に少々期待が膨らむというもの。

「あのね！ 人間だったよ！ 刀持ってたね！ 何かね！ 怖かった！！」

「そうか」

喋り続ける犬っぽい少年　ふさふさの尻尾を生やしているからきっと人狼なのだろう　を適度に流しながら相手しつつ荷解きをしていた。

それから数分後、豪快に扉が開け放たれる。

「わいはクサビ」イリヒサ！　けったくそ悪い教師に捕まって遅うなった！　まあ一緒に部屋で生活するんやからきっちり上下関係を

……あ

「あ

「なんや、お前かいな」

知り合い？　とハンスは聞いてくる。

二人は苦笑して頷いた。

「名前聞いとらんかったな」

「キリル」スライムプリンスだ」

「僕はハンス！ ハンス」レガス」ヴェアウルフ！ レガスの息子だからレガスってつくんだよ！ 恰好いいでしょ！」

「そうけ」

クサビも肩に掛けていた鞆を下すと荷解きを始めた。

ベッドは自然と一番下はハンスで二段目はキリル、三段目はクサビのものとなる。

そうして三人は試験にあったことなどを語りつつ夜を過ごすのだった。

といっても話すのは一方的にハンスであったが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7515w/>

魔物学園 高貴なスライムと忠実ではない仲間たち

2011年10月10日01時24分発行